

厚生産業会館（仮称）建設先送り求める声も 新年度予算案などで活発な常任委員会審査

市議会は3日から常任委員会審査が始まっています。（写真は9日の文教経済常任委員会）

審査のトップは厚生常任委員会でした。注目した議論のひとつは要援護世帯に対する除雪支援についてです。平良木議員が、「他の災害と違って雪の場合は災害救助法の適用前と後で簡単に分けられない。直前であつてもいくぶんの遡及ができる補完措置が必要ではないか」と訴えました。市役所側は、「法でのさかのぼり、要綱での飲み込みなど（の手立てが）あるかも知れないが、どこで線を引くかは難しい。（どうあれ）間違いなく検証してみたい」前向きでした。法適用前（多雪地帯で1世帯当たり6万5600円）と後（1世帯当たり13万4200円）では除雪援助費に倍以上の開きがありますのでこれはぜひしっかりと対応してほしいものです。



建設企業常任委員会では、（仮称）厚生産業会館をめぐる議論に注目しました。同会館の建設は村山市長の選挙公約のひとつで、地域事業費の不足などが表面

化する中で、建設するかどうかを含めて慎重な対応が求められています。塚田俊幸議員（合併前上越市選挙区選出）が、「普通に考えれば、無いよりもあつた方がいい。しかし、事務事業の総ざらいをやり、廃止・見直しで市道などに待ちに待っていたものを削ってきた経過がある。先に延ばしてもいいのではないか。13区のみなさんがやる事業も、また遅れてしまうのではないか」などのべていきましたが、多くの議員の共感を呼びました。また、日本共産党議員団の樋口議員（同）も、「どういう規模のものをつくってもらおうか。市役所職員だけで検討するには限界があるというなら、市民に知恵を借りてこの施設があるかどうかを含めて検討すべきだ」と訴えていました。これも当然のことだと思えます。

開校準備会が改修工事の終わった吉川高等特別支援学校を見学

県立吉川高等特別支援学校の校舎・体育館などの改修工事はすでに1月中旬に終わり、現在は開校に向けて机や事務機器などの搬入などが行われています。

4月の開校を前に10日、第7回開校支援準備会が同校会議室で開かれ、学校見学と今後のスケジュールの確認が行われました。

学校見学では赤松校長が校舎、体育館の全体がどうなっているかを説明した後、管理棟、体育館、教室棟の一つひとつの部屋を丁寧に案内してくれました。（写真は音楽室）

管理棟の1階でまず案内していただいた部屋は保健室でした。床や壁には木材が使われてい



た。作業室は7つあります。接客の勉強をする部屋、福祉をイメージして学ぶ部屋、スパー、ホームセンターなどでの仕事をイメージし、商品の出し入れ、値札貼りする部屋などがありました。

床も壁も新しくなり、校内はとてもきれいでした。学校見学会は30日、午前10時から午後4時まで行われます。「地域の皆さんからぜひ見ていただきたい」とのことでした。

ました。木の香りもラックでもリラックです。教室棟の1学年の教室には新しい机とイスが搬入され、現段階で決まっている入学生の名前も机の上に置かれていました。

日本共産党演説会のご案内

長引く不況、豪雪のなかで“住民こそ主人公”の立場でがんばってきた日本共産党の幹部が県政政策、議会改革の提案などについてお話します。

日時： 3月20日（日）午後6時から

場所： リージョンプラザ

お話する人

日本共産党上越地区委員長

いとう 誠

日本共産党新潟県政策委員長

武田 勝利

日本共産党上越市議会議員団 団長

橋爪 法一

三月になりました。晴れた日の早朝、久しぶりに散歩をしました。歩き始めたら、デコボコのある道路の路面が凍っています。水がたまっていて、氷には直線的な模様があつて、路面との隙間に半透明の氷のブリッジが出来ています。氷が張ったところを歩くと、割れていくのがわかる音が長靴の底から聞こえてきます。とても気持ちがいい。

近くの雑木林は三月になって、雪解けがどんどん進みました。木の根のまわりだけでなく、あちこちに地肌が見えるようになりました。林の中にある雪は多いところでも三〇センチほどしかありません。地肌が広がるたびに、春が確実に近づいていることを感じます。

林のすそのところで目に留まったものがあります。ひとつは落ち葉、何枚もの木の葉が折り重なっていました。木の葉は何種類もあつて、大小実にさまざまです。これらのなかには、穴があいているもの、ちぎれているものもありました。長い間、雪に押しつぶされていて、ペしゃんこになっているかと思つたらとんでもない。触つてみたら、けっこう弾力があるのでびっくりしました。落ち葉には霜が下りていて、そのおかげで葉のふちが鮮明になっていますし、葉脈もはっきり見えます。

ドングリもありました。最初見つけたのは二個です。そのうちのひとつは割れていて、赤くなつた実がいまにも飛び出しそうでした。何で赤くなつているのかと思ひながら、辺りを見渡すと、ありました、ありました、同じ形のドングリが五つも六つもあつてはあります。いずれも割れ目が入っていました。これから、暖かくなると芽を出すのかも知れません。調べてみたくありません。

落ち葉のそばに、霜をかぶつた小さな草の芽が出ていました。色は、そうですね、薄緑とよいでしよう。草の葉の形は見覚えのあるギザギザです。これは間違いなくヨモギです。今年初めて見ました。母に教えれば、すぐにでも採りに行くと言ひ出すに違いありません。

鳥たちの鳴き声が聞こえてきました。一番大きいのはカラス。小さなスズメたちは細かく動き、動くたびに声を出しています。川からも鳴き声が聞こえてきました。どうやら川面で泳いでいるカモのようです。盛んに鳴いています。私が思つていた以上に神経質な鳥で、写真を撮ろうと雪の上を歩き始めた途端、川面をたたきようとして飛び立ってしまいました。最初は三羽だと思いましたが、ちよつと時間を置いて別の二羽も飛び立ったらしい。斜め上の空には五羽が旋回していました。

大滝商事の石置き場のところへ行くと、今度は雪解け水が道路の側溝に流れ落ちて音が出ました。ボールペンほどの太さの水量ですが、柱状節理の岩石が積み重ねられている場所から絶え間なく流れ出ています。溶け出す雪がある限り、当り前の光景なのに、しばらく見入ってしまいました。

道路の路面が凍っているせいなのでしょうが、吉川橋を走り抜ける車の音はいつもよりも大きく、ゴォーッという音になって聞こえてきます。そして、電車の警笛も聞こえてきました。柿崎駅を電車が発車する時の音なのでしょう。駅からは六キロメートルも離れているのに、よく伝わってくるものです。

霜に名残惜しさを感じ、落ち葉のそばのヨモギの芽吹き、雪解け水の音などで心がうきうきしてくる。雪解けの頃の散歩はいつも新しい発見があつて楽しく感じます。

「心に太陽を、くちびるに歌を持って」と青木校長が激励

7日は上越市立中学校の卒業式でした。地元の吉川中学校の卒業式に参列してきました。今年の3年生についての私の印象は、「地域行事に参加して盛り上げてくれた中学生」です。特に越後よしかわやつたれ祭りや神輿を担ぐ彼らの姿は強烈でした。未来の吉川を担うのはおれたちだ、彼らがそう意識していたかどうかはわかりませんが、吉川区に生きている者にとってはものすごくうれしい出来事でした。

今回の卒業生は43名です。青木校長のはなむけの言葉でも、「明るく楽しそうな雰囲気を持った学年で、今年は特に最上級生としてのたくましさを持っていた」「学校行事だけでなく、学習でも生徒会活動でも部活動でも主体的に取り組んできた。地域行事にも積極的に取り組んでいたことを忘れません」と評価されていました。

青木校長は中学校の卒業というひとつの節目にあたって「心に太陽を持って」という詩を朗読されました。ツェーザル・フライシュレン作、山本有三訳の詩です。

青木校長は、「いま世界は大きく変わろうとしています。皆さんは、うまくいかないことも悩むこともあるかも知れない。そんな時、この詩を思い出してほしい。いつも心に太陽を持ち、くちびるに歌を持って、

正しく、強く、誇り高く生きていってほしい」と呼びかけました。とても素敵なのはなむけの言葉でした。卒業生の心にずっと残ることと思います。

注目の「巣立ちの言葉」は松原春菜さんがのべました。体育祭や音楽発表会、尾神遠足などについて語りながら、「一緒になることで喜びを倍に、悲しみを半分にしてきた。この絆の思い出を胸に卒業していきます」とのべました。学校生活でお世話になった人たちに対する感謝の言葉では、先生だけでなく、用務員、給食調理員など生徒の学校生活を支えてくれたすべての人たちにお礼をのべていたのには感心しました。最後に、「これからは皆さんが吉中の新しい歴史をつくっていく番だ。皆さんはひとりではない。たくさんの人に支えられ、誰かを支えていることを忘れないください。きょうまで吉中の一員であることは私たちの誇りです」と結びました。いい卒業式でした。

